呼びかけ語の学習指導
ーことばの体系性、位相差、暴力性を学ぶー

小川　俊輔

1 はじめに

1．1 呼称の問題

吉田裕久先生が1990年に書かれた論文に「学校における先生・子供の呼称」がある。これは、学校の内外で、教師が生徒を、生徒が教師を、教師同士、生徒同士、それぞれどのように呼ぶか、また、相手にどのように呼ばれたいかについて、自称詞についても触れながら、校種（小・中・高）、場面、性別などの違いも含めて記述したものである。

自分自身をどう名乗り、相手をどう呼ぶかは、常に児童・生徒が頭を悩ませる問題である。男の子であれば、「僕」と「俺」のどちらを使うか、また、相手のことを「お前」というか、ファースト・ネームで呼ぶか、姓の呼び捨てにするか、一度は悩み、考えた経験があるはずである。

これらの語は、日本語学の世界では「人称詞」と呼ばれ、近年盛んに研究が行われている。外国語との対照研究が特に盛んであるが、本稿では、日本語の人称詞のうち、誰かを呼ぶときに用いられる「呼びかけ語」について、国語の授業の中で取り上げ、指導する方法と意義について述べる。

1．2 私はこれまでどのように呼ばれてきたか

本節では、呼びかけ語についての理解を深めるため、私自身がどのように呼ばれてきたかについて、簡単に記す。

家族・親族以外の人から呼びかけられた記憶の中で最も古いものは、保育園

の先生からの「俊ちゃん」である。このような男性への「ちゃん」付けは、幼児に対してなされるのが一般的である。しかし、母は今でも（34歳になった）私のことを「俊ちゃん」と呼ぶことがある。思春期、確か中学生の頃だったが、母から「俊ちゃん」と呼ばれることに違和感を覚えた私は（それまでずっと「俊ちゃん」であった）、「『俊輔』と呼んでほしい」と訴えたことがあった。その後、母も意識して「俊輔」と呼ぶようになったが、時折、「俊ちゃん」と言うことがあった。その状態が現在まで続いている。一方、現在でも私のことを「俊ちゃん」としか呼ばない人たちがいる。祖父母、おじ、おばである。父方・母方の区別なく、誰もが私を「俊ちゃん」としか呼ばない。他方、父は、私の記憶の限りでは、一貫して「俊輔」であった。

小学校では、どの先生からも「小川君」と呼ばれていた。しかし中学校では、「小川君」と呼ぶ先生と、「小川」と姓を呼び捨てにする先生とがおられた。多くの場合、男性の先生は「小川」で、女性の先生は「小川君」であった。どの先生だったかは覚えていないが、「小学校では先生から○○君、△△さんと呼ばれていたと思うが、中学校では、○○、△△と呼び捨てにする。」と宣言され、驚いた記憶がある。高校では、性別に関わらず「小川」と呼び捨てにする先生がほとんどだった。

友達同士では、小学校ではあだ名だった。中学校の級友からは、まず「小川君」と呼ばれ、親しくなるとあだ名になった。中学校では男子卓球部に所属したが、先輩のことは「○○先輩」と呼び、先輩からはあだ名で呼ばれるか「小川」であった。高校では、男子生徒同士では名前の呼び捨て、女子生徒とは「小川君」⇔「△△さん」が一般的であった。所属した應援團部では、男性の先輩のことは「○○さん」と呼び、先輩からは「小川」と呼び捨てにされた。大学では、男性からは「俊」「俊輔」と呼ばれることが多く、まれに「俊君」と呼ぶ人がいた。女性からは「俊君」「俊ちゃん」が多かった。

２　国語の授業で呼びかけ語について学ぶ

２．１　『サザエさん』に見られる呼びかけ語

陣内正敬（1990）「『サザエさん』に見られる呼びかけ語」は、日本語教育における呼びかけ語の教授について、漫画『サザエさん』を用いてこれを行う

ことを提案するユニークな論文である。以下に、同論文に掲げられた表「サザエさん一家の呼びかけ語」（p.74）を示す（一部改変）。続いて、表に対する陣内の解説・解釈（pp.72-76）を箇条書きにして示す。

表１　サザエさん一家の呼びかけ語

①＼②	波平	舟	マスオ	サザエ	カツオ	ワカメ	タ　ラ
波平		母さん	マスオくん	サザエ	カツオ	ワカメ	タラちゃん
舟	お父さん 父さん		マスオさん	サザエ	カツオ	ワカメ	タラちゃん
マスオ	お父さん	お母さん		サザエ	カツオくん	ワカメちゃん	タラちゃん
サザエ	父さん お父さん	母さん	マスオさん		カツオ	ワカメ	タラちゃん
カツオ	お父さん 父さん	母さん お母さん	マスオ兄さん	姉さん		ワカメ	タラちゃん
ワカメ	お父さん 父さん	母さん お母さん	マスオ兄さん	お姉ちゃん お姉さん	お兄ちゃん		タラちゃん
タ　ラ	おじいちゃん	おばあちゃん	パパ	ママ	カツオ 兄ちゃん	ワカメ お姉ちゃん	

【注】・①：呼びかける側、②：呼びかけられる側

・複数の語が示されている場合、上段が使用頻度の高い語

・タラ→カツオは「カツオ兄ちゃん」、タラ→ワカメは「ワカメお姉ちゃん」

（１）年上から年下に対してはファースト・ネームの呼び捨て

例外１：波平→マスオ＝「マスオくん」、舟→マスオ＝「マスオさん」

例外２：マスオ→カツオ＝「カツオくん」、マスオ→ワカメ＝「ワカメちゃん」

例外３：家族全員→タラ＝「タラちゃん」

解釈：例外１・２は義理の親子・兄弟関係だから。「さん」「くん」は≪改まり≫の表出。例外３はタラが幼児だから。

（２）年下から年上に対しては原則として「親族名称＋さん」

補足１：波平・舟に対してサザエ・カツオ・ワカメは「お父（母）さん」「父（母）さん」の両方が可能。しかし、マスオは常に「お父（母）さん」。これは義理の親に対する≪改まり≫。

補足２：カツオ・ワカメ→マスオは「マスオ兄さん」。「兄さん」の前に「マスオ」がつくのは、義理の兄に対する≪改まり≫。

補足３：「お」の有無について、波平は「お父さん」、舟は「母さん」と呼ばれる率が高い。伝統的気風の強いイソノ家では、父親に威厳がある

からか。他方、呼びかける側の年齢も影響し、成長につれて「お」が減る。

補足４：サザエは舟に対して「母さん」のみ。同性の気安さからか。

補足５：タラは「パパ」「ママ」を除き、一貫して「親族名称＋ちゃん」と呼ぶ。ワカメはサザエとカツオに「お＋親族名称＋ちゃん」（ワカメ→サザエ＝「お姉さん」は用例が少ない）。「ちゃん」付けは、呼びかける側の幼児性と関わる。

（３）波平⇔舟は親族名称ベースの「（お）父さん」⇔「母さん」。マスオ⇔サザエはファースト・ネームベースの「マスオさん」⇔「サザエ」

解釈：波平⇔舟の「（お）父さん」⇔「母さん」は子どもの立場に立った“親族名称の虚構的用法”[1]。タラはマスオとサザエを「パパ」「ママ」と呼んでいるので、いずれマスオ⇔サザエも「パパ」⇔「ママ」と呼び合う可能性がある。

（４）敬称、愛称に性差が反映する

実態：(a)マスオ→カツオ＝「カツオくん」、同→ワカメ＝「ワカメちゃん」
(b)波平→マスオ＝「マスオくん」、舟→マスオ＝「マスオさん」
(c)マスオ→サザエ＝「サザエ」、サザエ→マスオ＝「マスオさん」

解釈：(a)は呼びかけられる側、(b)(c)は呼びかける側の性差を反映。

陣内は以上の(1)～(4)を以下２点に整理する。

（５）家族内において年上に対しては親族名称ベース、それ以外はファースト・ネームベースで呼び合う。敬称、愛称の添えられ方には、性差、年齢差、親疎感などが反映する。夫婦間では“親族名称の虚構的用法”により親族名称ベースになることが一般的である。

（６）家族内においては、夫婦間を除いて、呼びかけ語は非相互的である。具体的には、親族名称で呼ばれた人は呼んだ相手をファースト・ネームで呼ぶ（例：カツオに「お父さん」（←親族名称）と呼ばれた波平は、カツオを「カツオ」（←ファースト・ネーム）と呼ぶ。**夫婦の場合は、両者同等と考えられているからか、相互的なファースト・ネーム、もしくは“虚構的用法”による親族名称である。**

以上、陣内による解説・解釈を整理して掲げた。以下では、陣内が判断を保留した点、あるいは触れなかった点について取り上げる。

（７）『サザエさん』一家の呼びかけ語は、男尊女卑思想を反映しているか？

波平⇔舟の夫婦関係では、波平→舟＝「母さん」、舟→波平＝「お父さん」「父さん」である。波平→舟に「お母さん」はない。これは、波平の地位的優位さを表していると解釈できる。同様に、マスオ⇔サザエでは、マスオ→サザエ＝「サザエ」、サザエ→マスオ＝「マスオさん」であり、サザエがマスオを呼び捨てにすることも、マスオがサザエをさん付けで呼ぶこともない。これについて陣内は、「（暗黙のうちに了解されている）夫婦間の上下関係がある」（p.74）という説を紹介する一方、「マスオさん」という表現について、「‘女性らしさ’を出すための女性特有の『美化語』表現の一種」（p.74）とする解釈を挙げて両論併記のかたちをとっている。舟→波平の「お父さん」も、波平の地位的優位さ・夫婦間の上下関係とみる解釈と、女性特有の「美化語」表現の一種とみる解釈とがあり得る。

また、波平・舟の子どもたち（サザエ、カツオ、ワカメ）は、波平を「お父さん」、舟を「母さん」と呼びがちである。陣内はこれを「伝統的気風のイソノ家では父親の方が（見かけ上）威厳をもっているのかも知れない」（p.73）とする。

他方、サザエさんの公式ホームページにはサザエさん一家の登場人物の年齢が書かれており、それに拠れば波平 54 歳、舟 50 ン歳、マスオ 28 歳、サザエ 24 歳である。舟の年齢は「50 ン歳」とされており、波平とどちらが年長か分からないが、マスオ・サザエについては、マスオが 4 歳年長である。「マスオさん」⇔「サザエ」という呼び合いは、この年齢差が影響している可能性もある。

（８）『サザエさん』一家の呼びかけ語における“親族名称の虚構的用法”

波平⇔舟が「（お）父さん」⇔「母さん」と呼び合うのは、“親族名称の虚構的用法”であり、「親族名称の子供中心的な使い方（鈴木、1973 年、pp.166-172）」でもある。イソノ家において、この“虚構的用法”が使われ続けるのであれば、

マスオ⇔サザエも、タラが用いる「パパ」「ママ」を互いの呼びかけ語として用い始める可能性がある。

他方、家族内での“親族名称の虚構的用法”においてしばしば観察されるのが、家族の最年少者を基準にして親族名称を用いることである。イソノ家の場合、波平と舟は、タラを基準にして家族（特にサザエ）から「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼ばれてもおかしくない。また、カツオとワカメは（実際にはタラの叔父と叔母だが）家族から「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」と呼ばれても不思議ではない。だが、そうなってはいない。理由は明確でなく、様々な解釈ができそうである。

（9）タラ→カツオ＝「カツオ兄ちゃん」、タラ→ワカメ＝「ワカメお姉ちゃん」はなぜか？

タラはマスオ・サザエの子であり、カツオ・ワカメはサザエの弟妹である。つまり、カツオ・ワカメはタラの叔父・叔母である。本来ならば、「カツオ叔父さん」「ワカメ叔母さん」となるはずだが、「カツオ兄ちゃん」「ワカメお姉ちゃん」である。これは、カツオ・ワカメとタラの年齢の近さにその理由を求めることができそうである。サザエさんの公式ホームページに拠れば、カツオ11 歳、ワカメ９歳、タラ３歳である。年齢が近いために、一般的には「年配の男女」をイメージさせる「叔父さん」「叔母さん」ではなく、「兄ちゃん」「お姉ちゃん」が選択されていると考えられる。

もう１点、カツオには「カツオ兄ちゃん」、ワカメには「ワカメお姉ちゃん」である理由、つまり、カツオには「お」が付かず、ワカメには付く理由は何か。１つの解釈は、カツオの「オ」とお兄ちゃんの「お」が連続することを嫌うという音声学的な理由である。これとは別に、カツオとワカメの性別の違いによる、という解釈があり得る。また、カツオとワカメのキャラクターの違いを反映している、という解釈も可能である。サザエさんの公式ホームページは、カツオとワカメについて、次のように紹介している。

カツオ：頭の回転が早くて口が達者なお調子者。クラスで一番目立つ存在です。趣味は野球とサッカー、そしてイタズラ！

ワカメ：優等生タイプでしっかりものの優しい女の子。勉強は好きだけど、体育はちょっと苦手です。

以上のとおり、カツオは「お調子者」であり、「野球とサッカー」「イタズラ」を趣味とする元気で快活な（腕白な）少年として描かれている。実際にカツオとタラは（外で）一緒に遊ぶ場面がよく描かれる。このため、丁寧な印象を与える「お」が省かれる一方、ワカメは勉強好きで優等生的なキャラクターなので「お」が付けられている、という解釈はどうだろうか。

２．２ 授業の展開例（概要）

本節では、呼びかけ語の学習指導について、一例を示す。紙幅の都合上、詳細な指導計画、指導案などは省略し、概要のみ記す。

一．導　入：誰にどのように呼ばれているかを発表する。
二．展開１：「サザエさん一家の呼びかけ語」（表１）を見、どのような規則があるか考え、解釈し、発表する。グループワーク。
三．展開２：自分の家族、あるいは、『サザエさん』以外のフィクション作品（漫画、アニメ、ドラマ、小説、映画など）における家族の呼びかけ語を表にまとめ、発表する。
四．まとめ：日本語の呼びかけ語の特徴について整理する。

一では、本稿 1.2 に書いたようなことを、数名に発表させる。二では、2.1 に書いた様々な規則と解釈を、十分な時間をとって生徒自身に考えさせる。生徒自身が規則性（と例外と）を発見し、柔軟な発想で現象を解釈できるよう留意する。三では、生徒に呼びかけ語の表作りから体験させる。様々な事情で自身の家族のことを書きたくない（書けない）生徒もいるだろうから、『サザエさん』以外のフィクションを取り上げてもよいことにする。四は授業のまとめである。全二時間（または一時間）。教科書は使用しない。

３ 大学一年生による呼びかけ語の報告

本稿の筆者は、勤務校（県立広島大学人間文化学部国際文化学科）の授業で、前掲の陣内論文を輪読し、若干の解説を行った後、前節で記した三の活動を実践した（2014 年度、後期、１年生、「基礎ゼミⅡ」）。以下に、学生が提出した

表を２つ掲げ、サザエさん一家とは異なる呼びかけ語の姿を示す。なお、個人が特定されないよう、名前を変えているところがある。

３．１　Ｉ家の呼びかけ語

表２　Ｉ家の呼びかけ語

①＼②	しょうぞう	りさ	ゆうた	ゆき	かずえ	みつこ
省三		りっちゃん	ゆうさん	ゆきさん	おかん	お母さん
理沙	しょうちゃん		ゆうた	ゆき	お母さん	みっちゃん
勇太	お父さん	りっちゃん		ゆきさん	おばあちゃん	みっちゃん
由紀	お父さん	りっちゃん	ゆうさん		おばあちゃん	みっちゃん
和枝	しょうぞう	りさちゃん	ゆうちゃん	ゆき		みっちゃん
光子	しょうちゃん	りっちゃん	ゆうちゃん	ゆきちゃん	お母さん	

【注】・①：呼びかける側、②：呼びかけられる側

・省三と理沙は夫婦。勇太と由紀は省三と理沙の子。和枝は省三の母。光子は理沙の母。

（１）“親族名称の虚構的用法”

サザエさん一家とは異なり、勇太・由紀にとって父方・母方双方の祖母が表に登場している。この２人は「みっちゃん」「お母さん」と呼び合っている。光子→和枝＝「お母さん」は、「光子の娘＝理沙」の夫である省三のお母さん、の意味であろう。“親族名称の虚構的用法”である。

（２）「ちゃん」付けの拡がり

光子は、娘の夫である省三以外の全員から「みっちゃん」と呼ばれている。また、光子は和枝以外の全員を「ちゃん」付けで呼んでいる。報告してくれた学生の話では、「光子の親戚は、皆、『ちゃん』付けで呼び合う」由。その言語文化が、Ｉ家の呼びかけ語に大きな影響を及ぼしている。光子の実子・理沙が子どもを含む家族全員から「りっちゃん」「りさちゃん」と「ちゃん」付けで呼ばれ、理沙が夫・省三を「しょうちゃん」と呼ぶのも、上記「ちゃん」付け文化の影響だろう。この事例は、呼びかけ語の体系性をよく示している。

（３）親子関係

勇太・由紀→省三＝「お父さん」であるの対し、省三→勇太＝「ゆうさん」、省三→由紀＝「ゆきさん」で、父親が実の息子・娘を「さん」付けで呼んでいる点が注目される。他方、勇太・由紀→理沙＝「りっちゃん」であり、子どもたちが実母を「ちゃん」付けで呼んでいることも特徴的である。このことについて学生は、「父親と子どもとの間には、親と子の関係がはっきり表れている。だから呼び方も親族名称の「お父さん」が用いられている。一方で、母親とは親子であるが友達のような関係なので、名前の愛称が用いられている。この違いは、私が中高生のとき、父が単身赴任をしていて、家にいる時間が少なかったからだと考えられる。」と報告している。このような観察・解釈ができるところに、生徒自身に自分の家族の呼びかけ語を分析させる意味や価値がある。以上の解釈は当たっていると思われるが、子ども２人が母親のことを「りっちゃん」と呼ぶ背景には、(2)で述べた「母方の家系における『ちゃん』付け文化」があると考えるべきだろう。

３．２　Ｓ家の呼びかけ語

表３　Ｓ家の呼びかけ語

①＼②	しげる	ちよ	とおる	たかこ	かのん	たくと
滋		ばあさん	重山くん	貴子	かんちゃん	たっくん
千代	おじいさん		重山くん	貴子	かんちゃん	たっくん
徹	おじいちゃん	おばあちゃん		貴子	かのん	たくと
貴子	父さん	母さん	しげちゃん		かんちゃん かのん	たっくん たく
花音	熊じいちゃん	熊ばあちゃん	父さん	母さん		たっくん たく
拓人	熊じいちゃん	熊ばあちゃん	父さん	母さん	かんちゃん	

【注】・①：呼びかける側、②：呼びかけられる側

・滋と千代は夫婦で、貴子の実の父母。徹と貴子は夫婦で、花音と拓人は２人の子。

・滋と千代の姓は熊田。徹、貴子、花音、拓人の姓は重山。

（１）夫婦関係

滋⇔千代は「おじいさん」⇔「ばあさん」と呼び合っている。花音・拓人の立場に立った“親族名称の虚構的用法”である。また、サザエさん一家におけ

る波平⇔舟の「お父さん」⇔「母さん」と同様、「お」の有無において性差が認められる。徹と貴子は「しげちゃん」⇔「貴子」である。「しげちゃん」は名字「重山」に基づく「ちゃん」付け呼称、「貴子」はファースト・ネームの呼び捨てで、これは、結婚以前からの呼びかけ方が、結婚後も、また、花音・拓人の出生後も継続しているとのこと。

（２）親子関係

徹は義理の父母にあたる滋・千代を「おじいちゃん」「おばあちゃん」と呼んでいる。花音・拓人の立場に立った“親族名称の虚構的用法”である。これに対し、貴子は実の父母にあたる滋・千代を「父さん」「母さん」と呼んでいて、徹と異なっている。花音と拓人は、徹を除く家族全員からファースト・ネームに基づくニックネームで呼ばれている。徹だけは、花音・拓人をファースト・ネームの呼び捨てにしている。本稿の筆者による調査の限り、「父親は実子をファースト・ネームの呼び捨てで呼ぶ」というのは、かなり一般性のある法則（傾向）で、特に、父親が息子を呼ぶ際には、ほとんどの場合あてはまる。3.1で挙げたＩ家における省三→勇太＝「ゆうさん」は数少ない例外であった。

（３）兄弟関係

花音⇔拓人の姉弟は「かんちゃん」⇔「たっくん」「たく」のようにファースト・ネームに基づくニックネームで呼び合っている。サザエさん一家の例に照らせば、拓人は花音を「お姉ちゃん」と呼びそうだが、そうなってはおらず、あたかも恋人・友人関係のような呼びかけ語が使われている。花音さんの報告によると、幼い頃、「お姉ちゃん」と呼んでほしくて弟にそう依頼したが、照れくさい、という理由で拒否されたとのこと。「兄・姉が弟・妹に『お兄ちゃん』『お姉ちゃん』と呼んでほしくてそのように頼んだが断られた」という報告は、かなり多くの学生から受けた。一方で、「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」と呼び・呼ばれる兄弟姉妹も多かった。両者の違いは、親の判断（言語観）、教育が影響しているようであった。すなわち、長幼の序を重んじる家庭では「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」が使われ、親が年齢による差をあまり考慮せず、子どもを同等に扱おうと考えている場合、ファースト・ネームに基づく呼びかけ語が使われるようである。但し、これには、兄弟姉妹の年齢の広狭も影響する。

（４）孫は祖父母をどう呼ぶか

祖父母は孫から「（お）じいちゃん」「（お）ばあちゃん」と呼ばれるのが一般的である。他方、祖父母には父方・母方の２つがあり、これをどう呼び分けるかが問題になる。表３のとおり、Ｓ家では母方の祖父母は「熊じいちゃん」「熊ばあちゃん」と呼ばれている。姓の「熊田」から一字借り、これに「じいちゃん」「ばあちゃん」を付している。【注】のとおり、父方の姓は「重山」で、表に登場しない父方の祖父母は「重じいちゃん」「重ばあちゃん」と呼ばれている。子どもは成長するにしたがって使用語彙を拡大させていく。「姓の一字」＋「じいちゃん」「ばあちゃん」で父方・母方の祖父母を名指すこの呼びかけ語は、合理的であり、洗練されている。祖父母に対する孫の呼びかけ語は、「呼びかけ」がなされる場所に父方・母方どちらか一方の祖父母しかいない場合、単純に「（お）じいちゃん」「（お）ばあちゃん」となる。他方、双方の祖父母がその場所にいる場合（孫の七五三や誕生会などを想像されたい）、「祖父母の住んでいる地名」＋「じいちゃん」「ばあちゃん」、例えば「小倉じいちゃん」とか、「横浜のばあちゃん」となることが多い。これは、地名を覚えなければならない点で、Ｓ家の方式より（幼い子どもにとって）難しい。Ｓ家の「姓の一字」＋「じいちゃん」「ばあちゃん」は、見事な呼びかけ語と言えよう。

３．３　家族の呼びかけ語を分析することの意味と価値

3.1(3)に記したとおり、家族が使用している呼びかけ語であれば、使用意識、経緯などをかなり詳細に分析することができる。それを教室で共有できる状況・環境にあるのであれば、是非そのような授業を行いたい。しかし、「家族の呼びかけ語」というのはきわめて私的な情報であり、これを教室で共有することには様々な問題があるかもしれない。その場合は、(1)家族が登場する『サザエさん』以外のフィクション（漫画、アニメ、ドラマ、小説、映画など）の呼びかけ語を分析する、(2)学校（部活動など）の先輩・同級生・後輩の呼びかけ語を分析する、などの代替案が考えられる。(2)については、小学校と中学校（および高校）での呼びかけ語を比較すれば、各々の特徴が際立ち、深い学習に繋がるのではないかと考えられる。

呼びかけ語には、きわめて規則的・体系的な側面があり、かなり明確な性差もある。また、ある家族や仲間うちだけで共有されているルールもあり、集団

語的でもある。呼びかけ語は、ことばの本質（体系性、位相差）を学ぶための優れた材料であると言えよう。

４ 呼びかけ語の暴力性について

本章では、呼びかけ語の暴力性について述べる。例として「お兄ちゃん」を取り上げる。渡辺友左（1998）「『呼称』という論点」（『日本語学』17(9)）に、1990年１月９日（火）付『朝日新聞』朝刊の「子どもテーマ相談室」に掲載された次のような内容の投稿記事が紹介されている。投稿者は、２人兄弟の母。小学４年生になった兄が、３歳年下の弟に対し、「呼び捨てにせず、お兄ちゃんと呼んでほしい」と訴えた。それまで兄弟はお互いを呼び捨てにしていたが、小学校の友人に「それはおかしい。『お兄ちゃん』と呼ばれるべきだ。」と指摘され、弟に「『お兄ちゃん』と呼んでほしい。」と訴えた。その後、兄弟間で綱引きがあり、最終的に、兄は「お兄ちゃん」と呼ばれるようになった。以下は、その後の兄弟の様子についての記述である。

> あれから一年。兄の思い通り「お兄ちゃん」は定着した。それにつれ、兄弟の立場も微妙に変化してきた。お互いが名前を呼び捨てのころは、たとえば、片付けをいいつけると、同じ責任のもとにやった。叱られる時も、同じ立場でしかられた。
>
> ところが今、弟にもやれる程度のことを頼んでも「お兄ちゃんの方が大きいんだから、お兄ちゃんがやって」。叱られる時も「お兄ちゃんの方が大きいから、僕より悪いんだよ」。
>
> 一方の兄は「お兄ちゃん」なんだという自覚が出てきて、手伝いもよくやるかわり、弟に対して威圧的になる場面が多いが、総じて頼もしくなった。弟も兄に反発しながらも、親より頼りすることが多くなった。
>
> （渡辺、前掲、p.5）

以上の引用に、本稿の筆者が「呼びかけ語の暴力性」と呼ぶものの実態がよく表れている。「お兄ちゃん」と呼ばれる兄は、「兄として振る舞う」ことを暗黙裏に期待される。それで、上の引用に登場する兄も、親の目から見て「頼もしく」なっている。これはプラスの効果だが、一方で気になるのが、「弟に対して威圧的になる場面が多い」という記述である。「お兄ちゃん」という呼びかけ語が、彼を「威圧的」にしているのではないか。また、この兄にはあてはまらないが、本稿の筆者の周囲には、必要以上に我慢し、自らの意見や立場を主張しない兄・姉が多くいるように思う。さらに、兄を「お兄ちゃん」と呼ぶよう強要（教育）された弟は、引用文の弟のように、弟として振る舞うことを（良くも悪くも）内面化してしまうのではないだろうか。もちろん、それを長幼の序として当然のことと考える立場もあるだろうが、少なくとも親には、それぞれの立場や心情に寄り添った配慮が必要だと思われる。

「呼びかけ語の暴力性」について、もう１つ別の例を挙げる。自分の子に子が生まれた人、つまり孫ができた人に対する「おじいちゃん」「おばあちゃん」について。人は、孫ができると、その孫からみて「おじいちゃん」「おばあちゃん」になる。これは親族名称である。他方、「おじいちゃん」「おばあちゃん」には、「老年の男女」を意味する用法がある。それで、前者の意味で「おじいちゃんになったね。」「おばあちゃん、おめでとう。」と言われた人が、これを後者の意味で捉えて、「私は年寄りではない」「年寄り扱いするな」と反発する、ということがある。これは特に女性に多いようである。このように、「呼びかけ語」は人を傷つける場合があるので、注意が必要である。

以上のような「呼びかけ語の暴力性」についても、授業の中で取り扱いたい。

５ 呼びかけ語を生徒指導に利用する

家族内呼称と「家族の人間関係」との相関について心理学的（統計的）な方法で分析・記述した著述に、横谷謙次（2014）『家族内呼称の心理学』がある。以下、同書各章の結論部分を引用する。

- 「夫から妻への呼称は、妻から夫への呼称よりも、夫婦間のコミュニケーションや夫婦満足度と関連する」（p.57）
- 「子どもから父親への親族名称は、養育態度や会話頻度や父子関係満足度と有意な関連を示していた。一方、子どもから母親への親族名称は、母子関係満足度と有意な関連を示さなかった」（p.69）
- 「無規定な呼称[2]が非機能的な談話モダリティ、つまり横柄さ、疎遠さ、異常さと関連する」（p.83）

・「無規定な呼称が家族の非機能性を表す」（p.107）
・「無規定な呼称を使用する父子、夫婦関係、及び家族はそうでない父子、夫婦関係、家族に比べて、緊張・葛藤度が有意に高かった。一方、母子関係では緊張・葛藤度に有意な差が見られなかった」（p.115）
・「無規定な呼称を使用する夫婦、父子、母子関係、及び家族はそうでない夫婦、父子、母子関係、及び家族に比べて有意に身体的暴力もしくは致死的暴力を行いやすかった」（p.127）

以上のとおり、呼称（呼びかけ語以外の人称詞を含む）と、家族の人間関係との相関が示されている。これは、「呼びかけ語の実態が分かれば、児童・生徒の家庭の実態が、一定程度予測できる」ことを意味する。

教師は、以上のことを踏まえ、たとえば気になる児童・生徒がいる場合、家族にどう呼ばれているか、家族をどう呼んでいるか、家族がどう呼び合っているか、尋ねてみるとよい。また、誰かがいじめや嫌がらせを受けている場合、暴力的、侮蔑的な呼びかけ語が用いられていることが多い。また、いじめのきっかけが、軽はずみに付けられたあだ名（呼びかけ語）である場合も多いだろう。教師はそれらを見逃さず、適切に生徒指導を行うことが求められる。

6　おわりに

本稿では、主に、呼びかけ語を国語の授業の中で指導する方法、意義について述べた（第１章～第３章）。本稿の副題に示したとおり、呼びかけ語は、ことばの体系性、位相差を学ぶのに適した材料である。児童・生徒が日常的に用いていることばに基づいて、ことば遣いの背景にあるルール・規則を学ばせることは、彼らの言語観、言語感覚を磨く上で、有効であろう。他方、呼びかけ語には暴力性があること（第４章）についても、よく理解させ、家庭や教室において不適切な呼びかけ語が用いられていないか、耳を澄ませ、指導していくべきである（第５章）。

【注】

1　「親族名称の虚構的用法」については鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』pp.158-178に詳しい。

2　呼びかけない、呼びかけの感嘆詞（「ねぇ」「おい」「ちょっと」）、罵倒２人称（「貴様」「お前」「手前」「おのれ」のいずれかから派生したことば）、通常２人称（「あなた」「君（きみ）」から派生した２人称）の４種。横谷（2014）における定義。詳しくは同書 pp.37-40 を参照。

【参考文献】

陣内正敬「『サザエさん』に見られる呼びかけ語」、『言語文化論究』1 所収、pp.71-77、1990年
鈴木孝夫『ことばと文化』、岩波新書、1973 年
横谷謙次『家族内呼称の心理学：集団の構造と機能への呼称の関与』、ナカニシヤ出版、2014 年
吉田裕久「学校における先生・子供の呼称」、『日本語学』9(9)所収、pp.25-31、1990年
渡辺友左「『呼称』という論点」『日本語学』17(9)所収、pp.4-11、1998 年

【引用ウェブ・ページ（最終アクセス 2014.11.30）】

キャラクター紹介（フジテレビ、『サザエさん』公式ホームページ内）
http://www.fujitv.co.jp/sazaesan/character.html

＊西本喜久子	（にしもと きくこ）	広島大学大学院修了生
＊羽田　潤	（はだ じゅん）	兵庫教育大学
早野賢謙	（はやの まさあき）	岐阜総合学園高等学校
＊原田大樹	（はらだ ひろき）	鹿屋市立野里小学校
平田顕久	（ひらた あきひさ）	広島市立広島工業高等学校
福島浩介	（ふくしま こうすけ）	関西学院千里国際中等部・高等部
前田眞證	（まえだ しんしょう）	福岡教育大学
間瀬茂夫	（ませ しげお）	広島大学
又吉里美	（またよし さとみ）	岡山大学
松坂由美	（まつさか ゆみ）	三原市立本郷小学校
村井万里子	（むらい まりこ）	鳴門教育大学
＊宮本浩治	（みやもと こうじ）	岡山大学
＊守田庸一	（もりた よういち）	三重大学
＊森美智代	（もり みちよ）	福山市立大学
矢羽田真理	（やはた まり）	福岡市立野間中学校
籔田知子	（やぶた ともこ）	広島市教育センター
山下(井元)頼子	（やました(いもと)よりこ）	吹田市立千里丘中学校
＊山元隆春	（やまもと たかはる）	広島大学
吉田裕久	（よしだ ひろひさ）	広島大学
＊若木常佳	（わかき つねか）	福岡教育大学
渡邊博之	（わたなべ ひろゆき）	福山市立城南中学校

国語教育学研究の創成と展開

2015年3月31日　発行

編　者　『国語教育学研究の創成と展開』編集委員会
発行所　株式会社　溪水社
広島市中区小町１－４（〒730-0041）
電話（０８２）２４６－７９０９
FAX（０８２）２４６－７８７６
E-mail:info@keisui.co.jp

ISBN978-4-86327-295-8 C3081